
終末預言

ぬじゅわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

終末預言

【Zコード】

N1725M

【作者名】

ぬじやわきし

【あらすじ】

突然、発せられたこの世の終わりの預言！パニックに陥った人間の本性を描いたコメディホラー！

事のきっかけは、鳥賊対大学での講義であつた。教壇に立つてゐるのは還暦を迎えたばかりの九墨教授である。その時の講義の内容はかつて孤島グラで栄えていた帝国ヌジャワキシンの歴史であつた。「えゝ、西暦368年、イル・ナンケストラウラウー十一世はペランクチと呼ばれる麻薬の使用を取り締まるために法を改正しました。

相田小見朗と言う青年は、退屈そうにそれを聞いていた。本来聞く気などないのだが単位を落とさないためにも聞かなければならぬ。

突然九墨教授は頭を抱えて大声で吠えるようにうめいた。相田含めて生徒等はどうしたのだろうと彼を見た。九墨教授の顔が上がつた。白眼を剥いて泡を吹いていた。そして痙攣しながら別人のような大声で叫んだ。

生徒はざわめいた。

一
朕は…神帝なり…朕は…この九星教授の口を通して、この世界の
終わりを告げたもう思ふ…皆の衆、ヴィデオキヤ・メラを準備せよ

生徒等は急いで携帯を取り出した。相田はカメラを取り出した。
「九墨教授は踊り出し、七五調で言つた。神

「これから起きて、出来事は、世界の終わりの前触れだ、蟻が突然踊りだし、月が微笑み笑いだし、鉛筆転がしこーろころ、人々が皆、コサックダンスを、した時この世は終・わ・る・だあああああ！！

！」

そして九墨教授は教壇に勢いよくヘッドスライディングして「うが落ちて氣を失った。しばしの沈黙の末、生徒等は出し抜けに恐怖に脅えて逃げ出した。相田も逃げ出しが、これはマスコミに知らせるべきだと察し、テープを「ページーして各新聞社に送った。

「一コースです。鳥賊対大学教授の九墨氏が講義中に奇行を行いました。以下、大学生徒から入手したVTR。

「…界の終わりの…触れだ、蟻が…然踊りだし、月が微笑…笑いだし、鉛筆転が…ころころ、人び…が皆、コサックダン…を、した時この世…終・わ・る・だああ…ああ…！」

「…どつやどつやどつや。仰向けになつた教授は癌だらけのまま氣絶している。画面は突然上下左右に揺れ、悲鳴が満ちる。VTR終了。

「…」これに対し九墨教授は『過労による一時的な錯乱だつた。申し訳ない。』大学長も『このような事が無いよう今後も指導して行きたい。』コメントしました。

しかし、この報道に相田はやはり疑問に思つた。そんなわけはない、あれは本当に終末の預言だつて、結局マスコミはそんなもんなのか。

そしてある日…

「やしじやしじや、やしじやしじや…」

どこからともなく小さな掛け声が聞こえて來た。いつたい何だろうと友達と街を歩いていた相田は見回したが分からぬ。悲鳴が聞こえた。何だろうか。

「やしじやしじや、やしじやしじや…」

やがて相田はその声が地面から響いている事に気付いた。そして地面を見た。相田は悲鳴を上げた。悲鳴は他方からも次々と上がつていた。友達も悲鳴を上げた。

「やしあやしあや、やしあやしあや、やしあ……」

なんと道路に大量の蟻が後ろ足一本で立ち上がりてやしあやしあ言
いながら踊っていたのだ。相田は友達、せりには見知らぬ、パニッ
クになつた人々と話し合つた。

「これは……」

「『蟻が突然踊りだし、』まさにこれではないか。」

「やしあやしあ。」

「氣のせいだよ。ただの偶然さ。」

「偶然？これが？必然にも程があるではないか。」

……その偶然あることは必然はせりに続いた。

ある夜の事である。

「おおお見ろ！」

「なんだよ……ん？……うわああ……」

「そんな……」

真空に遮られているにも関わらず、月が音を立てて「ガガガガガ」と震
えていた。やがて「ジジジ」と弧の形に地割れして溶岩が吹き出た。
まるでそれは……

「月が……月が微笑んでいる！」

そして地割れは上下に広がり裂け、高笑いのよつた声が聞こえた。

「へあつはつはつはつ、へあつはつはつはつはつ、へあつはつ」

「『月は微笑み笑いだし』預言は正しかつた！この世は終わる！終
わるうううう……」

「こんなにちは。」

「畜生！こんなアリエナイ荒唐無稽な事があつてたまるか！？」

「ははつ何を言つ。偶然だよ。偶然。」

「偶然なわけない！これは神の起こした必然だ！」

「ははつ馬鹿言え。いくら神でもここまで強引な事するか。」

「奴邪惡鬼神ならあり得るぢやないか。」

「なるほど。」

「やしあやしあ。」

「うわ、蟻が踊つてゐるよ…」

「次の預言はなんだつけ…？」

「『鉛筆転がしこ一ころころ、人々が皆

この世は終・わ・る。』」

「さうか、次は鉛筆だな。」

「サックダンスをした時

政府もようやく預言を信じるよつになつた。そして預言の成就を恐れたのか、鉛筆廃止令を出した。たちまち全国各地の鉛筆の回収命令が出された。

さて九墨派と呼ばれる集団がいた。彼等はかの九墨教授の預言を成就すべきだ、と言う信念を抱えていた。恐ろしい事に九墨派が鉛筆工場を乗つとつた。

鉛筆工場で彼らは集会を開き、何やら拍手しながら預言の一節を唱和していた。

「鉛筆転がしきーろこり、鉛筆転がしきーろこり、鉛筆転がしきーろこり。」

追い詰められた人間は何をしだすか分からいとはまさにこの事である。辺りには集団の狂気に満ち満ちていた。やがて九墨派の代表が鉛筆の箱を持って叫んだ。

「時は来た！預言を成就させるのだ！政府は預言を阻止しているが、そうはいかない。今から我々は鉛筆を転がすのだ！今から転がすのだあああ！」

「おーー！」

そして人々は再び「鉛筆転がしきーろこり！」と唱和した。代表のその人は鉛筆の箱をゆっくりと傾けた。「鉛筆転がしきーろこり！」

鉛筆転がしきーろこり、鉛筆転がしきーろ

どんどん傾き、やがて箱から幾多もの鉛筆が飛び出した。鉛筆はざらざらと落ちてかんかんと地面を跳ねてころころと転がつた。そして盛大な拍手と歓声が上がつた。

「え…鉛筆が転がつたぞ！」

「もつとやれ、もつとやれ！」

連中は怒号を上げて暴徒の如く突進し、次々と鉛筆の箱を取り出し

て次々と地面にばらまいた。たちまち床は鉛筆に溢れ、鉛筆の代わりにつまづき転ぶ者もいた。彼らの顔は鉛筆を転がした事への歡喜に満ちていた。

しばらくして九墨派の人々は去った。縛られていた工場の人々はなんとか抜け出し、電話に向かつた。そして警察に通報した。

>九墨派遂に鉛筆転がすく

本日未明、九墨派一団は鉛筆工場に侵入し、全ての鉛筆を転がした。警察は現在行方を追つている。これに対し目瘤総理は「今現在の状況において、このような軽率な行動に走った事に誠に憤りを感じる」とコメント。

このニュースをみて相田は驚いた。相田だけではない。多くの人々が恐怖に怯えた。「後はコサックダンスだけだ！」「そんな！」「いやああ！」「ひえええ、あわああ、むぎいい！」

そして預言がかなう事を人々は恐れた。預言を細かく見れば「人々が皆コサックダンス」なので、いつ自分が踊り出すか、それを怯えていた。「サックダンス禁止令なるものも出た。

だが、いつまで経つてもそれは来なかつた。あれだけ預言が成就したのに入々のコサックダンスだけは訪れなかつた。人々は焦つた。なぜ成就しない。はやく來い。「はやく來い！」もう預言に怯える生活はいやだ！」「いい加減終末来てくれ！」「終わりたい！終わりたいよおお！」

「いや待てよ？」と人々は気付いた。「我々がこう待つてるのは無意味なのでは？」「そうだ、九墨派を見習うべきだ！」「皆でこの世を終わらそう！」「おー！」

人々は次々とコサックダンスを始め、それは一気に広まつた。皆、預言から解放され、次の滅びへの期待に目を輝かせていた。

コサックダンスをしなかつたのは世界中で数える程しかなく、その中に相田がいた。

「ちょっと待て！それが作者の罠じゃないか？登場人物が言いなり

になつてはいけない！」

だがその言葉も虚しく、ひたすら人々は「サックダンスを続けていた。力尽きるまでそれは続いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1725m/>

終末預言

2010年10月9日01時58分発行